

小説の設定

時間 少年野球団が準優勝した年 = 一九六五年

現在 = 一九八三年

場所 四ツ谷駅の新道商店街の中村さんの店。

人物 私 = 放送関係の仕事をしている。

東京五輪から三年間、中村さんの二階に下宿していた。

中村さん = 畳屋の主人（店は大きい）

金銭には執着しない 家賃が相場の二割方安い

穏やかで謙虚な人柄 おやつをつき合ってやってくださいよ

職人一筋 針だこでたらこみたいに膨れあがった指

話好き スポーツ紙の見出しから新道少年野球団野球の話になった

新道少年野球団は強かった

新宿区の少年野球大会で準優勝した。

決勝戦を延長十二回まで戦った。

新道の投手は自分の息子一人だった。

午前の準決勝と続けて十九回も一人で投げた。

真夏のかんかん照りの下であった。

自分の息子が十九回まで投げ抜いたことを自慢したかった。

新道少年野球団 = 昔の新道商店街の繁栄

新道商店街

当時

現在

豆腐屋、ガラス店、お惣菜屋、ビリヤード屋、普通の家、歌舞伎役者の住まい生活があった。

自足していた。

自信のようなものがみなぎっていた。

たいていの日用品は新道のなかにある店で間に合っている。

住む人だけを相手にして暮らしが立っていた。

自分たちだけでやっていける。生活力がある。

飲み屋、食べ物屋、喫茶店

厚化粧。

素っ気ない。

華やか。

脆い。

派手で華やかな外装の店が並んでいる。

外からの客相手に商売をしている。

店だけがあって人が住んでいない。

客が来なくなれば寂れてしまう。

パレードでナインが一斉に泣きだした理由

よほど口惜しかった

ナインのその後

投手	英夫	畳屋	商店街で畳屋
一塁	明彦	洋服屋	千葉へ引っ越し丸の内で会社員
二塁	洋一	お惣菜屋	新宿のホテルのコック
三塁	忠	ガラス屋	コンピュータ技師
遊撃	光二	文房具屋	神奈川の中学校教師
左翼	常雄	豆腐屋	埼玉で自動車学校の経営
右翼	誠	魚屋	文化放送前の小料理屋
捕手	正太郎	洗濯屋	詐欺師？

中村さんが正太郎のことを口にしたくない理由

息子の英夫や常雄が正太郎に詐欺にあったから。

新道少年野球団の思い出に傷がつくから。

息子が正太郎をかばう気持ちがわからないから。

話し始めると能弁になった理由

正太郎への恨みと、理解しがたい息子のことを誰かに聞いてほしいから。

英夫 = 父親を立てている。

理想的な親子関係

中村さん = 息子を信頼しきっている。

英夫 正太郎

悪のように見えるけど、やはりぼくらのキャプテンである。

ぼくらのためになることをして歩いている。

英夫は、正太郎に騙され、その穴を埋めようと、仕事に精を出すようになった

常雄は、奥さんが正太郎と問題を起こしてから、高慢な女から別人のようになった

洗濯屋 = 汚れた衣類を預かって、洗ってきれいにする。

正太郎 = 自分が悪者になって汚れを引き受けて、問題をきれいに解決する。

私 英夫

決勝戦まで一緒に戦ったから、チームメートを信じるようになった。

決勝戦での出来事

正太郎が前に立って日陰を作った。

他のみんなもなって前に立った。

投手の英夫と、弱虫の八番打者の常雄が日陰で休んだ。

パレードで泣いた理由

× 決勝戦で負けたことが悔しいのではない。

うれしかったから。

このナインにできないことは何もないと思ったから。

「だから」

ぼくらのためになることをして歩いている。

決勝戦の時の気持ちが今でもどこかに残っているから。

野球場に西日がささなくなってしまうことの意味

あの日を感動を二度と再現することができなくなった。

新道商店街の繁栄も二度とない。

まとめ

(1)昔と今の対比

生活があった昔の新道商店街と、厚化粧の今の新道商店街。

決勝戦を十二回まで戦ったナインと、高度成長によってバラバラになったナイン

ナインのためになることをしてくれる心の中の正太郎。

(2)主観（当事者 子ども）と客観（外部の人間 大人）の対比

パレードで、嬉しくて泣いたナインと、悔しくて泣いたと思った中村さん。

正太郎の詐欺行為に、感謝している英夫と、許せない中村さん。

正太郎を許すのは、僕らのためになることをして歩いていると信じている英夫君と、

決勝戦まで一緒に戦ったからだと思っている私。

(3)主題

深い感動を体験した者同士の信頼感

(4)正太郎が洗濯屋である理由

洗濯屋 = 汚れた衣類を預かって、洗ってきれいにする。

正太郎 = 自分が悪者になって汚れを引き受けて、英夫や常雄の問題をきれいに解決する。